二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS

空蝉
表紙イラスト／やすも

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『生徒会長 金城真里亜　恥辱の白濁補習』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

生徒会長
金城真里亜
恥辱の白濁補習
空蝉
表紙イラスト／やすも
二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

Characters

かねしろ まりあ
## 金城真里亜

生徒会長。空手の有段者。正義感が強く、悪人を許せない。

みそのたけし
## 御園 武

学園長の息子。親の権威を笠に着て、学内で悪行の限りを尽くしている。

夜空に輝く半月が白い校舎を煌々と照らし出している。そろそろ肌寒さの増す初冬の夜更け。昼間の喧騒が嘘のように静まり返る薄暗がりに包まれた廊下を、一人の女生徒が歩いていた。リノリウムの床を規則正しくコツコツと叩く、規律の取れた足取り。

一片の乱れもなく着こなしたブレザーの制服から、そして艶やかな黒髪に彩られる涼しげな美貌からも、少女の生真面目さが伝わる。

「……下校時間を過ぎて、校舎内に留まるのは本来校則違反だけれど。今回ばかりは仕方がないわね」

誰に言うでもなくつぶやき、腰元まであるロングヘアーを右手で梳き払う。日本女性は黒髪が一番美しく映えると、少女――金城真里亜は常々思う。それは真里亜が幼き頃から母、そして祖母と連綿と言い聞かされ続けてきたことであり、自身最も深くに刻み込まれた美徳でもあった。

――コツ、コツ……。

指定の上履きが規則正しい靴音を響かせるたびに、日本人離れした美巨乳がベストに押さえつけられてなお、ユサユサと上下に揺れる。闊歩する足自体も紺色のハイソックスに彩られた足首からすらりと伸び、しなやかな長い股下は学園指定の短めのスカートでは膝上までしか隠せない。背後からだとチラチラと覗く太腿が、悩殺的なことこの上ない。

入学したての頃はあまりの短さに辟易し、尻が後ろから見えないか着席のたびに留意し

たほどだった。

誰よりも女性としての慎みを自負する少女には、母方に北欧人の血が流れていた。そのため同世代の女子の中でも群を抜いてプロポーションがいい。胸や尻は大人顔負けにむっちりと張り出て、服を購入する際には採寸しての特注が基本だし、背も男子並に高い。目を引くこともあって、入学当初には随分とあけすけな目で見られたこともあった。

「……男子生徒って、どうしてああも下劣なんだろう」

脳裏に、今日も教室で繰り広げられていた男子同士の猥談が浮かぶ。誰と誰がキスしただとか、俺はもう経験済みだとかいった、正直耳を塞ぎたくなる会話だ。それは女生徒も同様で、中には男性との性経験を自慢げに語り聞かせる恥知らずなクラスメイトもいる。

そうした話題についていけない真里亜は、自然とクラスで浮いた存在となり、二年に進級してすぐ生徒会長などという堅苦しい地位を押しつけられるまでに至った。だが生徒を率先し導くことのできる立場についたことで、かえって生来の責任感の強さと生真面目さに火がついたとも言える。

『まずは自分が身を正し、手本に』。生徒会長を拝命して半年。一日たりとも気を抜かず学業と部活動に励んだ結果、今では徐々に慕ってくれる生徒も増えてきた。大半は女生徒で、所属する空手部に『お姉さまになってください！』などといった気合の入った恋文が届くこともしばしばである。

真面目過ぎる少女が今日に限り、校則を破ってまで校内に残っていたのには、とりわけ重大な理由があった。『夜の校舎で毎夜淫らな行為が行われている』。ここ最近そうした噂が、まことしやかに生徒間で囁かれているのだ。しかも噂によれば、男子生徒が女生徒に薬品などを用いレイプまがいのことまでしているのだという。

噂は当然教師や私立の学園を運営する理事長の耳にも届いているはずだが、彼らが調査をする節は一向に見られない。そのことから、真里亜にはある予感があった。理事長の息子が一つ上の学年に在籍していて、いい噂のない札付きの不良生徒ともっぱらの評判だ。彼が、今回の噂に噛んでいるとしたら。そして、噂が真実の出来事であるなら。

「もし、それが真実なら」

ぎゅっと右拳を固める。本当にそうした行為が行われているのなら、女である自分が何を言ったところで群れを成し獣と化した男どもは聞く耳など持ちはしないだろう。それならば、磨き上げた拳と蹴りとでねじ伏せるまでだ。少し、己の正義感に酔っている部分もあったのだろう。じっとりと掌に汗が浮いてくる。

――アァッ、アァァン……。

「……ッ。こ、この声って本当に……!?」

きゅっと唇を噛み、耳を澄ます。するとまた、明らかに陶酔した女の喘ぎ声が耳たぶをつんざいた。初めて耳にする同性の嬌声。汗ばむ掌を慌てて握り込む。否応なく本能に働

きかけ胸を高鳴らせる甘く蕩けた声音に、全身を緊張とほのかな昂奮が駆け抜けた。

「――くッ！　どこ、どの教室なの……」

口を震わせ言葉を紡いだ時にはもう足が勝手に走り出していた。カモシカのような筋肉に覆われた足をフル回転させて、手近の教室を片っ端から探っていく。そうして、開け放つこと十箇所近く。

――んんッ、ひぃぃぃ――――――！　オマ〇コ、気持ちいいのぉぉッ！

「……！　この部屋で？」

ついに、あられもない喘ぎ声が響く教室にたどり着き、戸の前に立つ。外から見る限りは何の変哲もない、ごく普通の空き教室。教室入り口にかかったプレートには家庭科調理室とある。普段、真里亜も頻繁に授業で利用する教室。日中は女生徒のきゃいきゃいとはしゃぐ軽やかな声の絶えない、甘い菓子や食欲をそそるご飯の香りに満ちた部屋だ。

部屋には明かりがともされていた。漏れ聞こえる嬌声はひっきりなしに、しかも段々と激しさを増している。いつも使う教室が今は男と女の獣性に満ちた性臭で溢れ返っているのだと思うと、まるで真里亜自身の学園生活そのものが穢されたようで、言いようのない怒りが湧き出してくる。

（こんなこと、許されはしないわ――！）

――ガラッ……ギィィ……。

固い決意の下に、少女の手が閉ざされた戸を開けた。
「ンンはぁ、もっとぉ！いっぱいおちんぽ詰め込んでぇぇ！」
「おら、こうか！　へへ、すっかりちんぽ狂いになっちまってるぜコイツ！」
わずかに戸を押し開いた直後。目に飛び込んできた光景に、息を呑み絶句した。今しがたまで胸を突き上げたぎっていた怒りは消し飛び、未知の行為を目の前に、怖気づいた脚がぴたりとその場に縫い止められる。
「俺のも咥えろ。ちんぽが多いほど燃える変態女がッ！」
「はぶぢゅっ！　ぢゅぽぉ！　んんぢゅりゅる、ぬぽぽぶぶぅぅぅ！」
犬のように四つんばいで全裸となった少女――年の頃は自身と同じくらいだろうか。真里亜の方に小ぶりな尻を向ける、小柄な少女の周りを下半身だけを剥き出した男たちが勃起をいきり立たせ取り囲む。
ある者は女の薄い尻肉を掴んで中心に肉の楔を埋め込み、また別の男は少女の唇に黒ずんだ肉筒を押し入れ、快楽に浸った蕩け顔を晒している。最も衝撃を受けたのが、少女の黒髪を肉棒に巻き、カクカクと腰を振り立てている者までいたことだ。
（あ、そんな……髪の毛まで汚されて。なのに、あの子、笑ってる……！）
垣間見た少女の表情は明らかに尋常の状態でなく、どこか遠くを見つめたおぼろげな目つきで、喜悦に緩んだ口元からよだれを垂れ流している。清廉な乙女が想像だにしなかっ

た性の饗宴。テレビの画面越しでも、イヤホンの絞られた音量でもなく。まさに目前で生の男女の絡む光景が、女生徒会長の初心な心根を萎縮させた。

（どうして、せっかくの髪を汚されて、笑っていられるのッ!?）

次いで湧き起こったのは、純然たる怒り。男たちの中央で汚される女生徒が綺麗に襟足で揃えられた黒髪をしていたことが、よけいに真里亜の憤怒に火をつけた。

――ひゅぅぅっ……。

「寒ッ、なんだぁ」

「……ぁ！　く、ふぁ」

わずかに開いた扉からの隙間風で、たった一人の女に群がっていた男たちが剥き出しの股間もそのままに、一斉に真里亜の方を向く。瞬間、心臓を鷲掴みにされたかの如く感覚が走り抜け、堪えていた吐息が漏れる。手をかけたままだった戸が一際大きな音を立てて開かれ、緊張が全身を包む。眉上で切り揃えられた日本髪が、浮き出た嫌な汗でぺっとりと張りついた。

「……誰だ、てめぇ」

「ねぇもっと、おちんぽぉぉっ……」

「こら、黙れ！　武さんが喋ってンだろぉが！」

武。そう呼ばれた男は机を寄せ集めた一段高い位置に腰を下ろし、傅く女が黒い砲身に

すがりつこうとするのを押し退けて、真里亜を真正面から睨みつけた。黒の革ジャンを羽織った上半身は肩幅も広く、腕っ節に自信があることが猛々しい表情からも窺える。

間違いなく、目の前の男が強姦集団の親玉。そして、金髪に染めた髪を短く刈り込んだ男の顔に、真里亜は見覚えがあった。

「御園……武。御園理事長の息子」

「なんだ、俺のこと知ってンのか。まさか、愛の告白でもしてくれるってのか、あァ？」

侮蔑に富んだ男の物言い。底の浅さを感じさせる直截な言葉で明らかにたかが女一匹と軽んじられたことが、かえって真里亜の意識を落ち着かせる。脚の震えは、いつの間にかやんでいた。

「……そう。やっぱり、貴方が首謀者だったのね。御園武先輩」

半裸の男たちの中心で尻を振る女生徒を見、そして女の奉仕をさも当然といった風体で受け止める男を睨む。一分、二分。武も真里亜も、互いに譲らず視線を逸らさないおかげで睨みあいは続き、緊迫した空気が辺りに漂う。そのうち、取り巻きの一人が単身乗り込んだ無謀娘の素性に気づき、声を上げた。

「あっ！　コイツ確かうちのガッコの生徒会長ッスよ、武さん」

「ほぉ。口やかましく堅物と評判の女生徒会長さんか。へっ、どんなどブスかと思ってたら……どうして。イイ乳と尻持ってんじゃねぇの。気の強そうなツラも俺好みだ」

「ひっ……!? い、嫌……好色な目で私を見るな！」

言葉尻に憤るよりも先に、肌を這う視線の感触に背筋が震える。服の上からだというのに、まるで直接肌を舐め這いずられているようなねっちりとした刺激。目前の男のねじくれた性根を体現したかの如く嫌らしい視線の愛撫。ベストを押し上げる丸い美巨乳を、短いスカートから今にも覗けてしまいそうなむっちりと張る尻たぶを、武は無遠慮に、値踏みするように眺めていく。

「……汚らわしいッ！ 父親の権力をかさにきて、女を力ずくで襲うしか能がない屑男が！」

――ぶぅぅんッッ!!

もう、憤りを押し殺すことはできなかった。双乳をぶるんと震わせ、背筋を這う嫌悪感そのままに、怒りを蹴りに乗せて放つ。

「ごぁぁッ!? ぐぇ……」

ノーモーションで素早く放たれた蹴りが手近の半裸男に命中し、頬を歪ませ唇を切ってうずくまる。その間、わずか数十秒。仲間がやられたことを理解すると、男どもは獣欲の昂りに任せて美貌の女会長目がけ殺到した。

「はぁッ！ あぁァァッ！ 私はたとえ理事長の息子であろうと手加減しないからっ！」

――ゴスッ！ ドゴォォ！ バギィッ――！

蹴りを放ち、固めた拳を男たちの腹に撃ち込むたび、美巨乳は左右上下に忙しなく揺れ、余分な酸素運動を少女の肉体に強要する。汗を振り乱し、黒髪をなびかせて健康的な媚態を晒す真里亜を、身じろぎ一つせずに武は真っ直ぐ見つめ続けていた。まるで、美しく舞う舞踏家に見惚れたかのように――。

「づぁぁ、こ、コイツ、強ぇッ……」

五人ほどをのした時点で、連中からの反撃はぴたりとやんだ。圧倒的な実力差の前に臆病風に吹かれた男たちの情けなさに呆れ返ると共に、そのような連中に胎の奥底まで犯され尽くした女生徒に憐憫の情が湧く。どれだけ薬を盛られたのかは推測すらできないが、いずれ意識を取り戻した彼女は、自分の惨状に何を思うのだろう。

「どうした、こねぇのか。へへ、それともやっぱ俺に抱いて欲しくなったか。安心していいぜ。俺ぁもう百以上処女膜突き破ってるからよ。お前の膜も綺麗さっぱり――」

「それ以上喋るな、屑がああああァァァァッ!!」

――びゅんッ――!

真里亜の腰が反転し、一瞬武に背を向ける。一際強く振り上げられた太腿が、全体重と高速のスピードを乗せてふんぞり返る男の鼻っ柱へと襲いかかった――!

武はニタニタと笑みを浮かべ、少女の股間を――振り上げた際に露出した、色気も何もない純白の綿パンツをじっくりと見据え続けていた。

「俺のキスがあんまり気持ちよかったんで気絶しちまったか。えぇ？」
「くっ、だ、誰が。無理やり唇を奪った程度で、図に乗らないで！」
唇を奪った当の男の言葉に、薄れかけていた屈辱が再び甦る。初めての唇を力ずくで奪われ、唾液まで啜られた。二度と消し去れない事実という名の傷が深々と刻まれてしまった。後から溢れる怒りで、握り締めた拳はぶるぶると震えている。きつく締め上げられていた肘の痛みも、意識の覚醒と同時にもうほとんど消えていた。
（今なら、たとえ男どもに束で襲いかかられたとしても、勝てる――！）
真っ先に憎たらしい薄笑みを浮かべた親玉に蹴りを見舞ってやろう。決然と二本の足で立ち上がり、即座に構えを取る。利き足と利き腕を前に、いつでも蹴りを放てる体勢で衣服の乱れを確認する。どうやら、気を失っている間に脱がされたり、触られたりはしていないようだ。
「心配すんなって。ただ可愛らしい寝顔を見てただけさ。なぁお前ら」
「へへ、武さんの言う通り。怒るとおっかねぇが、寝てる時は勃起モンの美少女だったぜ」
「貴方たち……ふざけるのも大概にして！」
冷静さを保つよう心がけていても、許せることとそうでないことがあった。言われなき侮蔑を受けて平然としていられるほど、まだ若輩の少女は達観しているわけではないのだ。思わず振り上げた拳を留めさせたのは、またしても余裕たっぷりの男、武の声だった。

ラブシーン読み飛ばしOK！

「待てよ、真里亜。俺たちが薬を使って、女をマワしてたことは知ってるなぁ？」
「ええ。貴方たちが性欲と下半身でものを考える、動物同然のケダモノだということもね」
昨夜遭遇した背筋の寒くなるような光景。おおよそ同年代の学生集団が行っているとは思えない淫欲の宴と、漂っていた生々しい牡牝の性臭とに想いを馳せ、まなじりが危険な角度で吊り上がる。臨戦態勢は解かぬまま、女生徒会長は努めて冷静な声で御曹司に次の言葉を促した。
「それがどうしたというの。まさか、私を同じような目にあわせられるとでも？」
先ほどは不覚を取ったが、捕まりさえしなければ連中程度の腕前に引けを取りはしない。不敵に頭二つは大きな相手を睨みつけた真里亜に、より尊大な牡の睨みが突きつけられた。
「ああ、さすがに昨日の蹴りはシビれたからなぁ。……そこで、人質を取らせてもらった」
「な、ん……ですって？」
「この学園の女子生徒を一人、例の薬を嗅がせて、別の場所に監禁してある。……クク、聡明な生徒会長さんなら、後は言わなくとも分かるよな」
へっへっへ、と周囲の男たちが釣られて笑う。四方を取り囲むようにじり、じりと狭められる包囲網に、少女は後退も前進もできず、攻撃の手さえ封じられてしまう。埃の積もる小部屋の床を、革靴が擦る。
（男の言葉の真偽は分からない、けれど……もし、もしも本当だったら）

この場で真里亜が男たちをのして鬱憤を晴らしたところで、何の関係もない少女が犯されてしまっては元も子もない。真里亜に残されている選択肢は、男たちの要求を呑むこと。それ以外になかった。

「私に、どう、しろと……言うの？」

振り上げかけた拳を下ろし、構えを解く。相手の意思を窺うように無意識に上目遣いで見つめてしまったことに気づき、後悔した時には遅かった。

「へへ、そうだな。んじゃぁ、ストリップでもしてもらうか」

「ス、ストリップ⁉ 貴方って男は、どこまで腐って……」

自分が男たちの面前で、一枚一枚肌着を脱ぎ捨てていく光景を想像する。淫蕩で、ふしだらな表情を浮かべた淫婦。そうしたイメージしかない、痴女の類に進んでなれと言うのか。図に乗った男の台詞に、頭に上った血が沸騰する。

「嫌なら、別にいいんだぜ。女には困ってねぇからなァ」

だが真里亜がやらなければ、他の誰かが同じ目にあわされてしまう。拒否したツケを他人に支払わせるなど、実直な少女にとって最も耐えがたきことだ。屈辱と、これから与えられるであろう恥辱に対して、痛いほど握り込んだ拳が小刻みに震える。

「くっ、やるわ。やればいいんでしょう……！」

周到な罠にはまり込んだと気づかされつつも、女生徒会長はついに受諾の言葉を漏らし

てしまった。

「こ、この上で脱げばいいのね？」

取り巻きの男どもによって敷かれた、硬く分厚いマット。狭い倉庫の中央に設えられた、粗末な四角い場所こそが少女の恥辱のステージ。煤けたマットに丁寧に靴を脱いで上がると、ねっとりと熱い男たちの貪欲な視線が四方から無遠慮に浴びせかけられる。

（うぅ、く、悔しい……でも私がやらないと、捕まっている女の子が犠牲になってしまう）

いずれ愛する人ができた時、その男性のみに捧げるはずだった肌。いまだ見ぬ伴侶のためだけに磨き上げてきた素肌を、今薄汚い小部屋の粗末なステージで自ら曝け出そうとしている。強制されているのだとはいえ、そのことがただただ口惜しく、一層少女の恥辱を煽る。知識すらない淫蕩行為に臨む中、むっちりと肉付きのいい内腿が震えだしそうになるのを、ぐっと腹に力を込めて堪えた。

背をかがめ、スカートの中が見えぬよう注意を払い片足を持ち上げて、足首を包む紺色のハイソックスへと手をかける。真里亜はできるだけ羞恥的被害の少ないものから脱ぐつもりでいた。しかし、少女の心積もりを踏みにじり、いつも真逆の方向に淫宴は進行する。

「おっと、靴下は脱ぐな。他は全部すっぽんぽんになってもらうが、靴下だけはダメだ」

「へへ、さすが武さんだ。分かってるっ！　痺れるなぁ憧れるぅ！」

宴の主催者の無慈悲な通告と、囃し立てる牡どもの下品極まりない嘲笑。生真面目で勉

学一辺倒だった真里亜に、男の持つ「フェチ」心理など理解できようはずもない。ただ不条理な難癖をつけられたものだと黒髪少女は理解した。

「まずは、その服の上からでも分かるデカパイを拝ませて欲しいねぇ」

「下品なッ。脱げばいいのでしょう……！」

つい、売り言葉に買い言葉で応じてしまったものの、実際に無数の異性の目がある中での脱衣には躊躇が残る。一枚ずつ脱ぎ捨てていくという行為が、よけいに破廉恥な行動として再認識させられた。それでも。監禁されているという見ず知らずの少女のことを思い、意を決して制服に手をかけた。

——しゅるぅぅぅ……！

「おほっ」

喉下のリボンを解きながら、武があけすけな目線を乳谷辺りに這わせてくるのを肌でじかに感じる。ベストを一気に脱ぎ捨てた勢いでたっぷりと膨らんだ柔肉球が二対揃って上下に跳ね、牡の目を釘付けとする。黒髪がなびいて、汗臭い小部屋にふわりと甘い香りを振りまいた。

「思った通り、でかい癖にぱつんぱつんだ。そら、シャツも脱げ。できるだけ色っぽくな」

（言われなくてもっ……うぅ、くぅぁはぁぁ……！）

——ぷつっ、ぷつつッ。ぷつんっ……。

一つ、また一つとカッターシャツのボタンが外されるたび、チラチラと覗く白い柔肌に熱視線が突き刺さり、牡の群れが歓声を上げる。はらり――ついに一番下のボタンも外れ、美しく縦長に整ったへそが可愛らしく姿を覗かせた。

「へへ、むしゃぶりつきたくなるねェ。ホント、そそる身体つきしてやがる」

「ち、近づかないで！　脱ぐだけの、約束でしょう」

無造作ににじり寄る御曹司に、胸元を思わず手で覆い隠して半身で牽制する。心底忌み嫌う下衆な男に肌を触られてしまう――。死んだ方がましだと思える屈辱を前に、知らず知らずに足が後退していく。

「おら、逃げんな。ふぅぅ～」

――ゾク、ゾクゾクゥッ！

「ひぃ……ッあ！　い、やぁぁ！」

突如背後に回り込んだかと思うと、熱い吐息をうなじに吹きかけられた。男たちに囲まれた狭いマット上で、逃げ場などあるはずもない。武の欲情を含んだ熱気は首筋をかすめ、耳たぶを揺すって、少女に甘い微電流を流し込んでいく。元々が過敏な肌への柔らかな刺激に、真里亜の膝ががくんと崩れかかる。

「おっと。危ない危ない」

――むにゅう、ぐにっ、ぎゅむぅぅ！

「いぁっ！ い、いたぁぁいィィッ！」
はだけたシャツのごわついた生地ごと乳房を鷲掴みにされ、ブラジャーの金具が柔肉を圧迫する感覚に、痛苦で眉根がたわんだ。悲鳴にも頓着せずに揉み込んでくる男の手つきは慣れていて、幾度もこうして強引に女を嬲ってきたことを窺わせる。
「くぅっ、はぁ、はっ……約束違反、よ、こんなの、ぅあンッ！」
ひしゃげたブラのカップの内側で、強かに擦れた乳肌がジンジンと疼く、痛痒の走る乳首は充血して隆起し、より衣服との密着を高めて擦れあう。真里亜にとって限りなく不利な悪循環が動悸を早めさせ、男に鷲掴みにされた乳鞠を追い詰めていく。
「約束、か。可愛いねぇ、ホント。ウブな生徒会長さんに、本気で惚れちまいそうだ」
――ぐんッ！ ビッ、ビヂィィィ――――――ッ！
「い、やぁぁッ！ やめなさい！ 手を、手を離してぇッ！」
拉致された時同様、背後からぴったりと密着され、ろくに抵抗らしい抵抗もできないまま、ついに男の暴力的な拳に屈したシャツが引きちぎられ、剥がれてしまう。
――うぉぉぉッ！
固唾を呑んでいた取り巻きどもが一斉にどよめく。皆、一様に目前に晒された白い果実へと血走った目を這わせていた。
（嫌ァ……見られてる！ 私の下着を、胸の谷間を汚らわしい目がたくさん見つめてる！）

獣欲に満ちた目で視姦される純白のブラジャーが、主の緊張と羞恥を伝えるように柔肉ごとブルリとひと震えする。そうした小さな動作一つ一つに、いちいち男たちは熱狂し、より熱心に隠された美巨乳のフォルムを想像しては欲望をたぎらせていく。

「でけぇ。早く生乳拝みてぇ～。武さん、まだっすかぁ。俺もう我慢できねっすよぉ」

「まぁ待てよ。メインは後回しだ。まずはスカートから、な？」

手下どもに向けてというよりも、豪腕で抱きすくめた少女に向けて、猛々しい牡は言い含めるように耳元で囁きかけた。「スカートを下ろせ」。暗にそう、命じているのだ。

「こ、これ以上は……本当に、嫌……。くン……いくら何でも、度を越し過ぎてるわッ」

乳房を揉まれたことで、ルール違反を犯されたという意識が、少女にはある。当然さらなる恥辱行為については拒絶して当然だと、安易で独善的な想いを描いていた。目の前の悪漢どもにまだ良心という存在が残されているのだと、どこか胸の内で考えていたせいかもしれない。だが、一旦火のついた牡が、正論をぶつけたところで収まるはずもないのだ。

「腰をフリフリさせながら脱げ！」

どこまでも下品で、本当に同年代かと疑いたくなるくらいに欲にまみれた獣声。

「そら、脱げよ。でねぇと捕まえてる女がどうなるか……」

淫艶の宴を支配する男が、人質という絶対有利な条件をかさに耳元で追い立ててくる。羞恥、屈辱、使命感。様々な感情が入り乱れての数秒の逡巡の後。真里亜は震える唇から

絞り出すようにかすれた声音を響かせた。
「わ、かった……スカートは脱ぐ、から。そこまでで譲歩してちょうだい」
男たちの昂奮がこのままでは収まらぬと知って、真里亜としても精一杯の譲歩をしたつもりだ。取り巻きどもは武の意思を窺うように視線を集中させ、当の武は承諾するでもなく拒否するでもなく、ただニヤニヤと薄笑みを零して少女の一挙手一投足を眺めている。脱ぐしかないと覚悟を決めると、スカートに添えた細い五指が勝手に震えた。
――しゅる、しゅるるぅ……！
（また見られてる。男たちが太腿やお尻を、じろじろ見つめてるぅ……）
前面からはぴったり閉じ合わされた内腿と股間のわずかな三角地帯に、背後からはうなじから背中、臀部へと至るなだらかな丘陵に、無数の熱視線を感じる。纏わりつくような視線に犯され、早まる鼓動で胸の内を掻き乱されて。それでも使命感だけに突き動かされて、小刻みに震える指先でファスナーを下ろし、スカート生地をゆっくりと大きな尻肉のカーブに滑らせる。先刻言われた通り腰をことさら左右に大きくくねらせて、振り落とすようにスカートを脱いでいった。
「はぁっ、あぁ、こっちを、見ないでっ……」
――すとんッ！
耐えがたい恥辱とほのかな高揚。相反する感情がせめぎあう中、ついに完全にスカート

が脱げ落ちてしまう。その下から真っ白なレース生地に彩られた上品なショーツが姿を見せた。もじもじと羞恥で赤らむ腿をすり合わせると、再びどよめきと歓声が巻き起こり、中でも一際よく通る野太い武の声が耳元で轟く。

「おいおい、昨日の綿パンツと違って、随分とお洒落なの穿いてンな。もしかして、期待しちゃってたとか？」

「ばっ、馬鹿なことを言わないで！　もうこれでいいでしょう……離してッ」

腰に回されしっかりと両腕をホールドする男の豪腕を振りほどこうと、躍起になって身体をよじる。極限まで刺激された羞恥心が、ある意味麻痺していたのかもしれない。黒髪を振り乱し、腰を振って逃げ出そうとする下着姿の真里亜に、獣欲を刺激された男たちが口々に囃し立ててきた。

「うへへ、乳がブルブル揺れてら。ひゅーひゅー、もっとやれー！」

「見ろよあのぷりっぷりの尻肉ぅ。パンパンバックから小突いたら気持ちいいだろうなぁ」

「うっ、うぅ、やめて！　恥ずかしいことを言うのは、もうやめなさいっ！」

まるで場末の娼婦の如く扱い。見世物としての自分を押しつけられ、無遠慮な物言いで心が幾重にも抉り回される。生まれて初めての屈辱だった。できることなら、この場から今すぐ消えてしまいたい。数刻前まで思い描いていた明日からの生活も、輝かしい未来も、今はその存在を確かめることすら困難だ。清廉だった自分を、思い出すことができない。

「はぁ～、この期に及んで泣き言とはねぇ。これじゃ、ストリップの続行は無理だな」
「えっ……」
思わず振り返った背中側で、これまでにない優しい笑顔で武が微笑んでいた。釈放してもらえるのか。淡い期待が胸をよぎる。もしかしたら、今になって理事長への報告を恐れる想いが彼の内で勝ったのかもしれない。期待が生まれたことで、心なしか拘束する腕越しに感じる男の体温までが優しく、温かく感じられて。本当に、全て浅はかな希望だった。
「仕方ねぇ。野郎ども、手伝ってやれ。……剥いてやんな！」
――うおおおおおおお！
「い、いやぁぁぁぁぁ！ 来ないで、来るなぁッ！ 離してっ……」
無数の怒声に、少女の悲鳴が掻き消される。四方から伸びた手に引かれ、ブラのカップがずれ、ホックが引きちぎられる。ショーツは尻谷に食い込まんばかりに引っ張られ、前面では薄い縮れ毛が数本、白い布地越しに透けて覗いた。
「おひょぅ！ ブラ、ゲットだぜぇ！」
白い衣を強引に剥がれた乳鞠が出鱈目に弾む。布地と擦れた乳首は二つともが充血して飛び出し、男たちの目を愉しませた。
（胸、見られてるッ。気持ち悪いのにッ！ 視線が、男のねちっこい視線が熱いよぉっ！）
一瞬でも暴虐な男を信じようとした自分が馬鹿だった。ようやくそのことに気づいても、

再度怒りに火をともす暇などありはしない。欲情した牡の魔手は、無数に肌を這いずり、待ってなどくれないのだから。

「せっかくのデカパイなんだ。見せつけてやりな！　へへ、綺麗な形してンじゃねぇの」

――ぐッ！　慌てて胸元へ伸ばそうとした両腕を、ボスの意図をくんだ男たちが左右へ引き伸ばし、乳肌から遠ざける。まるで透明の磔台に縛られたように、少女のしなやかな四肢は大の字に固定されてしまう。

「うひょぉ、すげぇデカ乳の癖に可愛らしい乳首だこと」

「へへ、マジさくらんぼみてぇ。ぽちっとしてて噛み潰したくなるよな！」

男の率直な感想は、語彙が少ないがゆえに的を射ていた。それが、より少女の穢れなき精神にできた真新しい傷にどす黒い泥を塗りたくり、抉り込んでいく。傷ついた心の怯えを隠すように、女生徒会長は持ち前の負けず嫌いを発揮することに躍起となった。

「っあ！　は、離せっ。卑怯者ッ！　変態！　多勢で女を襲うなんて、恥を知りなさい！」

「ふん、今さら女ぶるのかァ？　薄っぺらい正義の面の皮が剥がれたきたな、えぇ⁉」

――ぎゅぎゅむぅぅぅッ！

「くひぃぃぁあぁぁぁぁ⁉　痛いッ、無理やり、つねらないでっ、はっくぁぁんッッ！」

背後というベストポジションに陣取った御曹司の指が、腋をすり抜け巨大乳肉を二つ同時に鷲掴みにする。ごつい指で乳首をつねられる衝撃に、膝はガクガクとひっきりなしに

痙攣し、視界が瞬時に白く染まる。鬱屈した恥辱に泣き出したくなるのを、歯を噛み締めてどうにか耐え忍ぶ。全身が脱力するその隙を逃さずに、武の新たな号令が下る。
「おら！　今だ。最後の一枚も剥ぎ取っちまいな！　脱がしたら、俺に渡せ！」
甘い汁を吸わせてくれるボスの命令は絶対だ。淫欲に侵された牡たちは一斉に、頼りなげにむっちりの腰肉を覆い隠す布切れへと手を伸ばした。
「そぉれ、それそれ！　へへ、脱げるか、それとも先にパンツが千切れるか⁉」
――グィッ、ググゥゥゥ！
（嫌ぁっ、食い込む、お股にショーツが食い込んできちゃうぅぅ！）
真里亜の前面に居座った男がぐいぐいと股布を摘んで引き上げる。薄くとも伸縮性のある下着は引かれるままに伸び上がり、薄い翳りに覆われた股間に食い込んで、丸みを帯びたふくよかなフォルムをくっきりと映し出す。
「くひひ、結構モリマンだなぁカイチョーさん！」
「ケツもすげぇぜ。ハミケツどころの騒ぎじゃねぇ」
――ギチッ、ギュチチィィッ！
「い、あぁ、千切れるッ、ショーツ、お股見られちゃ……うぅぅ～ッ！　か、硬いのぉ！」
武とのわずかな隙間に手をさし込んで、手下が尻側の布地を引き伸ばした。当のボスはむっちりと張った尻肉へと学生服の股間をグリグリと押しつける。尻たぶでじかに感じる

牡の灼熱、牝の本能を脅かす雄々しいたぎりに、無意識に腰がくねり背後の膨らみへと誘い込まれる。日々培ってきた清廉な精神に、浅ましい牝としての抗いきれない本能がわずかながら勝った瞬間。

——ぶち……ッ！

ついに張力の限界に達したレースの下着が、腰脇の部分から千切れてしまう。

「あああああぁぁぁぁぁ！　見ないでッ、お願い見ないでぇぇぇぇ————————ッッ!!」

「へへ、マン毛発見！」

「おら、さっさと染みパン引っこ抜いちまえ！」

——しゅるっ、するぅぅ……！

はらりとはだけた布地の向こうに、黒々とした薄い翳りが覗く。肉厚の丘陵に生えた茂みの奥で少女の悲鳴に合わせて肉唇がヒクヒクと蠢く、その様までが克明に男たちの視線に焼きつけられる。股を擦り、引き抜かれた下着は宣言通り武の手に渡された。

「酸っぱいマン汁だぜェ。舌がピリピリすらぁ。くんっくんっ。へへ、優等生の処女マ〇コでも、やっぱパンツは臭ぇのか。堪ンねぇなぁ～この牝臭さはよォ」

レースの下着を裏返し、鼻を押しつけて男が慇懃に笑みを零す。恥ずべき部分の匂いを嗅がれ、味まで詳細に吹聴され——少女の自尊心と乙女心はバラバラに裁断される。

（やだよっ、こんなの、こんなの、嘘よぉぉっ……！）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**